

04

April
2024

[月刊] キリスト教書評誌

本の

HON-NO-HIROBA

ひろば

ISSN 0286-7001

一般財団法人キリスト教文書センター

1957年7月17日第三種郵便物認可

2024年4月1日発行(毎月一回1日発行)第796号

出会い・本・人

繰り返し読んできた本 土肥研一

特集シリーズこの三冊!

「信仰と虐待」を考えるなら、この三冊! 柳本伸良

本・批評と紹介

アウグスティヌス著/河野一典、松崎一平訳

アウグスティヌス著作集 第20巻II 詩編注解(6) 片柳榮一

日本キリスト改革派教会訳

ウエストミンスター小教理問答 齋藤五十三

田淵 諭著 光と祈りの礼拝堂 関川泰寛

酒井陽介著 ヘンリ・ナウエン 英隆一朗

李 信建著/朴 昌洙訳 こどもの神学 久保木聡

ジュセッペ三木 一著/佐藤弥生訳/松島雄一監修

百年間のカウントダウン 飯郷友康

マリ・ヨアスタッド著/魯 恩領訳 旧約聖書と環境倫理 関根清三

ロバート・W・プリチャード著/西原廉太監訳/中原康貴訳

アメリカカ聖公会の歴史 大宮有博

◆ 既刊案内

◆ 書店案内



不安という相棒

フリッツ・リーマン著／赤坂桃子訳 私たちの人生の一部である不安に上手に対処し、良い人生を送るためにはどうすればよいか。本書は精神分析的な視点から不安を四つのタイプ・対応するパーソナリティに分類し、より良き対処法を豊富な例証と共に記述。1961年の初版以来今日まで百万部近くを売り上げた戦後ドイツのベストセラー。

◆四六判・定価2970円



教会論と終末論

松田 央著 (著者は神戸女学院大学名誉教授)

イエスの言行に現わされた福音を信じ、教会生活を通して信仰を実践し、終末を待ち望む——この道筋を聖書に即して分かりやすく解説。キリスト論、教会論、特にサクラメント論、そして終末論を学ぶための好著。著者による積年の探求の成果。

◆四六判・定価2200円

サクラメントと終末論を
視野に入れた教会論

キリスト教信仰の根本を求めて



われら主の僕

リベラルアーツの森で育まれ

反響!

ICU伝道献身者の会編

2月26日 ◆A5判・定価2310円

記される興味尽きない証し。「寄稿者的一部」松永希久夫、小澤貞雄、新保満、竹前昇、原崎百子、川田殖、荒瀬正彦、齋藤和明、並木浩一、棟居勇、伊藤瑞男、斎藤剛毅、渡邊正男、絹川久子、長沢道子、左近和子、田中弘志、浅井重郎、吉馴明子、宮崎彌男、矢澤俊彦、青野太潮、安積力也、梅津順一、栗林輝夫ほか

旧約聖書 預言書 要約と概説

宮平 望著

◆A5判・定価2530円

旧約聖書の全文書を、章ごとヘブライ語原典に基づき要約、新約聖書の視点からメッセージを解説する。創見に満ちた解釈を随所に盛り込み、聖書通読と学びが楽しくなる。旧約の複雑多様な世界を読みための進める好個の手引き。

全4冊完結 律法書(2200円)、歴史書(2200円)、文学書(2090円)





繰り返して読んできた本

土肥研一

小さいころから、本を読むことだけが好きだった。でも、いつも新しい本を読みたくて、繰り返し読んだ本は多くない。

苦しかった中高生のとき、幾度も読んだのは、中島らも『僕に踏まれた町と僕が踏まれた町』。自死した友を悼む短いエッセイ「浪々の身3」が特に好きだった。18歳のすがすがしい少年のままにいる友に向けて、中年になった著者が言う。ゴミみたいな日々でも、本当にたまにだけ「生きていてよかった」と思う夜がある。だから「あいつも生きてりゃよかったのに」。

十代後半に出会ったのが大江健三郎。最初に読んだ『洪水はわが魂に及び』があまりに面白く、長編を中心に読み漁った。大江の主人公は、みんな小説を読みながら生きている。自分もそうやって生きたいと願った。今も読み返すのは『人生の親戚』。苦しみの中、特異なカトリック作家フラナリー・オコナーを読みながら生きていく主人公が忘れられない。

もちろんキリスト教書もたくさん読んできた。中でも繰り返し

し読んできたのは……。自分が編集者として関わった本を除くなら、まずは加藤常昭『ハイデルベルク信仰問答講話』。教理の言葉に血が通い、生活者の言葉になっている名著だと思う。折に触れてページを開いている。同じ理由で同著者の『雪ノ下カテキズム講話』も愛読してきた。さらに同じ理由でコリン・ガントン『説教によるキリスト教教理』も大好き。

そしてヘンリ・ナウエン。彼の本は全部大好き。中でも『愛されている者の生活』は日本語で読み、英語で読み、一人で読み、神学生と一緒に読み……。何回読んできただろう。本書でナウエンは人生を4つの受動態で捉える。Taken（取り上げられる）、Blessed（祝福される）、Broken（裂かれる）、Given（与えられる）。これは聖餐の際、司式者が行う4つの動作だ。私は聖餐のパン。苦しむとき、私は神に「裂かれ」ていて、その後には私が隣人に「与えられる」派遣の時が待っている。

（どい・けんいち＝日本基督教団白町教会牧師、編集者）



▼シリーズ この三冊！

「信仰と虐待」を考えるなら、この三冊

柳本仲良

(日本基督教団華陽教会牧師)

一昨年(2019年)の12月に『宗教の信仰等に関する児童虐待等への対応に関するQ & A』が厚生労働省から通知されました。これは、宗教の信仰に関連した児童虐待が「信仰に絡んでいるから」という理由だけで扱ってもらえなかったり、消極的な対応になったりすることを防ぐために、具体的な事例や留意点、現時点で活用することが想定される支援制度などを整理して作成されたものです。

これができた背景には、本来虐待に

当たるものが、宗教や信仰を理由にして擁護され、見逃されてきたために、多くの人が苦しんできた現実があります。たとえば、「宗教活動へ参加することを体罰により強制する」「交友や結婚の制限のため脅迫や拒否的な態度を示す」「宗教団体の職員等に対して、自身の性に関する経歴等を話すように強制する」などが挙げられます。

翌年10月23日に、日本基督教団から発表された「いわゆる『宗教二世』問題を新たに作らないための約束と宣

言」にもあるように、宗教の信仰などに関係するこうした虐待は、「カルト」と認識されていないキリスト教会にとっても無縁ではありません。教会が一部加担してきた女性差別、同化政策、宗教的迫害と同様、信仰が絡む虐待についても、自発的に問い直すときが来ています。

しかし、「信仰と虐待」という言葉を聞くと、「それはカルトの問題であって、私たちの問題ではない」とする態度が、しばしばキリスト教会の中で見られます。そこで今回は、「カルトの」問題としてではなく「キリスト教会全体で」捉える問題として、信仰と虐待について考える材料を提供してくれる三冊を紹介しようと思います。

1冊目は『**「信仰」という名の虐待**』です。いのちのことは社から発行された21世紀ブックレットシリーズの17巻

です。分厚い本を読むのが苦手な人でも簡単に読み切ることができ、スピリチュアル・アブユース Spiritual Abuse (信仰的・霊的虐待)の基本的な理解を助けてくれます。

この本では、一般的な宗教でも「信仰」の名目で人々の精神を操作してしまうケースがあると注意し、最初に二つの事例を紹介しています。1つ目は、礼拝の最中に、牧師が信者の一人を名指しで批判し、その人が悔い改めるまでメンバーと話をすることを禁じ、どんな行動をしたか全て自分へ報告するという指示をした、というケースです。

2つ目は、牧師と長老が信者の家を一軒一軒訪ねてまわり、「ある人と交わりを持つことは神様から見えてよくないから」と言って、交際をやめるよう指示をした、というケースです。どちらのケースも、信者が命令されるときは聖書の言葉が用いられ、従わなければ神の命令に背いたことになる……と

恐怖を抱くよう誘導されていました。

実は、同様のケースを私自身も何度か相談されています。信者でない交際相手と別れて信者同士で結婚するよう強要された、言われたとおりに献金しないと神の祝福を受けられないと脅された、教会の運営や会計について不明瞭な部分を指摘したら除籍をほめかされた……こうした問題が、宗教・宗派・教団を問わず起きており、どの教会であっても、予防と対処に取り組まなければなりません。

同時に、こうした問題の被害者は、「神様を裏切り、悲しませた」「霊的におかしくなった」と言われて、さらに教会の中で差別を受けてしまうことがあります。「教会から離れば地獄に落ちる」「永遠に赦されない」と言われ、逃げることも困難になります。何か問題のあるところから離れられても、重い後遺症に苦しめられるケース

もあります。

そのような生存者(サバイバー)のために、この本の1章6節では、回復のために必要なこと、役立つことのアドバイスもいくつか挙げてくれています。また、3章では、「信仰」という名の虐待からの訣別、予防をするために、自己や他者の尊厳を奪ったり、傷つけたりする教義内容・宗教思想の問題へ踏み込み、信仰を理由にして差別や虐待をする自由はないことを丁寧に強調しています。

2冊目は『LGBTとキリスト教——20人のストーリー』です。

一昨年、日本キリスト教団出版局から発行されたこの本が出てまもなく、キリスト教メディアに載った、とある書評で当事者への無知や偏見に満ちた侮辱的・差別的な内容が3回にわたって掲載されてしまい、多くの批判が集ま

りました。

私もショックを受けた一人でしたが、このことから分かるように、キリスト教会で「信仰」を理由に擁護され、見逃されてきた虐待の一つに、性的少数者への虐待があります。一部の教会やクリスチャンの家庭では、今でも、特定の性自認や性的指向を「治療」しなければならぬ対象として、矯正を働きかけるところがあります。

LGBTに関する正しい知識や理解があれば、これらは紛れもなく、差別や偏見に基づいた身体的・精神的虐待であると分かりますが、その意識がなのまま、「相手を正す」という使命感をもって当事者を傷つけ、命を削ってしまう行為があちこちで見られます。この本の中でも、牧師やクリスチャンから「同性愛は罪だ」と言われた人カミングアウトしたミッシヨンスクルの先生にまともに向き合ってもらえ

なかった人、性的指向を明かす度に「あなたの恋愛やセックスの相手にしないだね」という態度を取られてしまう人などが出てきます。

そのような経験は、自分の言葉が届かない、受け入れられないという現実を強烈に刻みつけてきます。しかし、それでも、相手に分かってもらおうと、誰かに知ってもらおうと、自分に与えられた在り方を証言していく人の姿は、勇気と励ましを与えてくれます。彼らの姿は、故郷や母国の人々になかなか受け入れられなくても、与えられた言葉と語り続けた預言者の姿と重なるようにも見えてきます。

私の中で特に印象深いのは、教会でカミングアウトする勇気を出せずにいた方が、牧師に同性愛者と気づかれ、教会に行けなくなったことで、かえって自覚していなかった抑圧から解放された……と告白する姿です。その人は

さらに、「10年通い続けた教会から切り離してくださったのは紛れもなく神さまだと感じています」と告げています。

それはちょうど、「汚れた者」として神殿に入ることを許されず、民と指導者から抑圧された異邦人や病人が、キリストと出会って解放され、良い知らせを伝える群れとなつていった福音書の奇跡を思わせます。この本で20人が紡いでくれたそれぞれのストーリーも、「信仰」という名の虐待からの解放と神さまとの新しい出会いをもたらす良い知らせとして、受け取ることができると思うのです。

最後に紹介するのは、『キリスト教と社会の危機——教会を覚醒させた社会的福音』です。

もともと1907年に書かれベストセラーとなった本ですが、その100

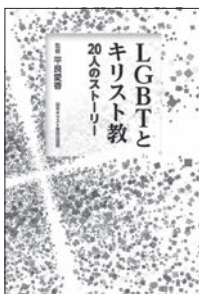


『信仰』という名の虐待』

マインドコントロール
研究所：編
いのちのことば社
2005年刊
A5判 95頁
電子版 935円

周年を記念して、各章に現在の牧師、教師、神学者などの「応答」をつけて2007年に再出版され、日本語に翻訳されたのが本書です。

先に挙げた2冊の本を紹介する際、教会における「『信仰』という名の虐待」や「性的少数者への虐待」について取り上げましたが、「両者に共通するのは、「自分たちが虐待に関わっていると認識しない」「この問題に向き合



『LGBTとキリスト教 — 20人のストーリー—』

平良愛香：監
日本キリスト教団出版局
2022年刊
四六判 240頁
2,200円

う必要を感じていない」という態度がしばしば見られることです。

この本においても、搾取、差別、格差といった「社会的虐待」を受けている人たちが、教会において放置され、正面から向き合ってもらえない現状が描かれています。しかし、その態度は、貧しい者たちの弁護者であった預言者やキリストの声を無視することにならないかと、鋭く指摘もされています。



『キリスト教と社会の危機 危機 —教会を覚醒させた社会的福音』

ウォルター・ラウシェン
ブッシュ：著
山下慶親：訳
新教出版社
2013年刊
四六判 540頁
6,710円

教会はしばしば、社会の問題を自分たちと切り離し、「ここはそういうことを考える場ではない」という態度をとってしましますが、既に、ここには虐げられた人たちがいます。いないことにされて、無視されている人たちがいます。その人々が回復され、取り戻されていくことこそ、本来の教会の姿だと思っております。

『アウグステイヌス著作集』

ついに完結！

〈評者〉片柳榮一



アウグステイヌス著作集 第20巻II

詩編注解(6)

アウグステイヌス著

河野一典、松崎一平訳



『アウグステイヌス著作集』の最後となった『詩編注解』は独特の魅力をもっている。アウグステイヌスは聖書注解において、次第に比喩的解釈を避け、字義通りの「逐語注解」に努めるよう傾いてゆく。しかしこの『詩編注解』においては、比喩的解釈がかなり自由に用いられ、彼の想像力のはびやかに、生き生きと飛翔している感がする。しかもその言葉は彼の生の深みから汲み出されている。

有名な「バビロンの川のほとり」(一三六編、新共同訳では一三七編)を取り上げてみよう。アウグステイヌスは「バビロニア」とは「混乱」を意味するという。「(我らは)エルサレムからの、すなわちシオンからの市民であって、この生の中に、この世のこの混乱の中に、このバビロニアに市民として住まうのでない」(二四七頁)。そして深い警告を語る。「バビロンの河々の流れに注意しなさい。バビ

ロンの河々の流れは、この世で愛されて過ぎ去りゆくものすべてだ……それが流れることに、注意しなさい。それが滑ることに」(二四九頁)。さらに比喩的解釈は広がる。「どっさい、いたるところでバビロンの河々は早瀬のように流れ、あえて中に入るひとたちをひっくり返して、流し去る。……だから捕らわれの身にあってわれらは低められて、バビロンの河々の流れのほとりに座ろう、われらはおのれを、あえてその河々の流れに投げ落としてはならない。……おのれをあえて高ぶりで持ちあげずに、座ろう」(二五〇頁)。アウグステイヌスにとって「座る」とは、流れて去る喜びにひたって己を高く上げるのでなく、この過ぎ去りの悲嘆のなかで己を砕かれて低くされることである。バビロン捕囚の悲哀のなかで故郷シオンを思って歌われたこの詩編は、アウグステイヌスにおいて、過ぎ去り行く事物

への愛に虜とされながら、なお永遠的なものを喘ぎ求める人間そのものの形姿へと彫を深めてゆく（パスカルはここから深く学んでいる―パンセ B:459）。

「深き淵より」で始まる一二九編を見てみよう。アウグステイヌスにとってここで問題の「深淵」は、この詩人だけのものではない。人間一人ひとりが抱える「深淵」のこゝとである。「それゆえ、わたしたち一人ひとりがどのような深淵にいて、どこから主に叫ぶのか、見るべきである」（一二二頁）。アウグステイヌスが見る「深淵」とはどのようなものか。「どんな深淵から主に向けて叫ぶべきかを我々も理解しなければならない。実に、わたしたちにとって深淵とはこの死すべき生である」（一二二頁）。そしてこの深淵からの叫びは遮るものを切り裂く。「その声はすべ

てを貫き、すべてを引き裂き、神の耳に達した」（一二二頁）。しかしこのことが可能であったのは、己の力によるのではない。「神の耳が祈願する者の心の内にあったのを、すべてが引き裂かれてその声が神の耳に達するのだと言ふべきであるならばだが」（一二二頁）。アウグステイヌスによれば、神の耳はすでに人間の心の内の、心そのものより奥底にすでに在り、耳を傾けているという。「内在的超越」の秘義を、ここにもアウグステイヌスは読み取っている。

（かたやなき・えいいち 京都大学名誉教授）
（A5判・九六二頁・定価二二〇〇円・教文館）



長老

そのつとめと実践

デヴィッド・ディクソン
石田静江・原田浩司*訳



長老として召された著者の豊かな経験に基づいて書かれた長老のための手引書。長老のつとめの本質を、実践をとおして明らかにしている。

長老に任職された人のために

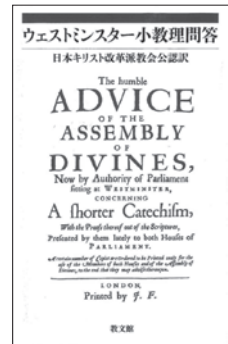
A5判・並装
定価【本体2,000＋税】円
ISBN978-4-86325-116-8



株式会社 一麦出版社
札幌市南区北ノ沢3丁目4-10
TEL (011) 578-5888
<http://www.ichibaku.co.jp>
携帯 mobile.ichibaku.co.jp

学問的対話を経た成果として

〈評者〉齋藤五十三



ウエストミンスター 小教理問答

日本キリスト改革派教会公認訳
日本キリスト改革派教会会誌



「ウエストミンスター小教理問答」（以下「小教理」）は一六四七年にウエストミンスター神学者会議によって作成された文書である。信仰内容の全体を示す「ウエストミンスター信仰告白」（以下「信仰告白」）、教理教育のための「ウエストミンスター大教理問答」（以下「大教理」）との有機的な関係の中、「小教理」は、初心者教育という役割を担ってきた歴史を持っている。

これら三文書を教会の信条とする日本キリスト改革派教会は現在、三文書の公認訳作成に取り組んでいる。これは、同教会による一九九四年の信仰規準翻訳委員会誌（以下「委員会誌」）以来、約三十年ぶりの翻訳事業であるが、その最初の公認訳として昨年十月に完成したのが本書である。「あとがき」によると、同教会が公認訳の条件として次の四点を重視していることが分かる。第一は、信頼できる底

本（「小教理」の場合一六四八年、聖句付き初版）に基づく忠実な翻訳であること。第二は、学問的批判に耐えうること。第三に、わかりやすく美しい日本語を使用すること。第四は、三文書間に統一性があること。

評者は、英語の原文、「委員会誌」、公認訳の土台である袴田康裕訳（『ウエストミンスター小教理問答』教文館、二〇一五年）と公認訳の全107問を並べて比較したが、第一から第三の点が十分に顧慮されているのを確認した。紙幅の関係で全てを紹介できないが、第二点の「学問的批判」に関する顕著な実例を一つ示したい。

公認訳の土台を提供した袴田氏が、その準備において最も対話に務めた翻訳は、日本におけるウエストミンスター三文書の研究をリードしてきた松谷好明氏による改訂版「小教理」（改訂版ウエストミンスター信仰基準）所収、

一麦社、二〇〇四年）である。袴田氏による講解（水垣渉・袴田康裕『ウエストミンスター小教理問答講解』一麦社、二〇一二年）を指南役に松谷詔と公認訳を読み比べる。と、袴田氏と松谷詔の間にどのような対話があったかが明らかになる。ここで注目したいのが「主の晩餐」前の自己吟味を教える間97である。全体として袴田氏は、松谷詔との対話を経て最終的に松谷詔と同じ方向での翻訳に至ることが少なくないが、間97では英語の構文が「自分自身を吟味すること」を中心に求めている点に触れ、「自分自身に裁きを招くことがないようにすること」（松谷詔、三三三〇頁）が中心であるかのような印象を与える松谷詔の課題を指摘している（『講解』一五五頁）。実は、松谷氏の最新の「小教理」（『三訂版ウエストミンスター信仰基準』所収、

一麦社、二〇一二年）ではこの点が修正されている。そうした両者の間の高度な学問的対話の成果が公認訳には反映されているのである。このように本書は「公認」に相応しい内容を備えた翻訳になっている。しかし、上述した四点のうち、第四に挙げた三文書間の統一性に関しては、「信仰告白」と「大教理」が未完成であるために検証することができなかった。日本キリスト改革派教会は八〇周年を迎える二〇二六年までに三文書全ての公認訳完成を目指している。今回の「小教理」公認訳の質の高さを思う時、残る三文書の完成が待ち望まれるところである。

「小教理」（『三訂版ウエストミンスター信仰基準』所収、

（さいとう・いそみ）東京基督教大学准教授
（新書判・七〇頁・定価八八〇円・教文館）

ヨベルの新刊 / 既刊案内



さげびはとどく 武田信嗣著

プーバリーの助けを頂き、二人で広がる世界を夢見る

独りは生きられない。二人では息が詰まる。三人ではこじれる。「二、三人の神学」ではどうだろう。キリスト教が人口1%の壁をどうしても越えられない傷みを、牧師として叫びながら、その叫びが希望へと変わる分岐点をマルティン・プーバリーを道しるべに丹念に探った書。 四六判・一六〇頁・一三三〇円



聖化の再発見 大頭真一と焚き火を囲む仲間たち 編著

好評！ 四六判・二四〇頁・一八七〇円

「先生の周りで『きよめ』で困っている人というのがあるでしょうか。えっ、いきなり、そこですか?! こちらがたじろぐ直球でズバズバ切り込み、現代に生きるキリスト者の聖化（きよめ）の問題を生活の最前線で解明せんと欲す。〈ジパング篇〉誕生。好評発売中！ 四六判・二四〇頁・一八七〇円

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷 4-1-1-5F
TEL03(3818)4851 FAX03(3818)4858
出版の手引き / 呈 (税込)

教会建築とは何かを 楽しく教えてくれる書物

〈評者〉 関川泰寛



光と祈りの礼拝堂

田淵 諭著



田淵諭は、不思議な人である。建築家でありながら、牧会者のようでもある。パウロも、伝道者の仕事を建築士になぞらえて、「わたしは、神からいただいた恵みによって、熟練した建築家のように土台を据えました。……」（Iコリント三・一〇）と述べているから、その印象はあながち間違っていない。

牧会者と建築家の仕事が似ているのは、考えること、実践すること、人と出会うことなどたくさん仕事をこなしつつ、それらが最後に明るみに出されるところにある。その仕事は、かの日に吟味される。教会は、教会員の交わりにおいても、礼拝堂や牧師館という建物においても、具体的な形を持つ。机上の空論を語るだけの建築家や牧師は、グノーシス主義者か好事家に過ぎず、その名に値するとは言えないだろう。

『光と祈りの礼拝堂』は、建築家田淵諭氏の四〇年に及ぶ教会設計の記録の集大成であるとともに、建築の素養の無い私のような人間にもわかりやすく、しかも楽しく教会建築の何たるかを教えてくれる書物である。冒頭の「教会設計をはじめに於て」という文章を読むならば、そのことが十分にわかるであろう。

部活動に明け暮れていた青年が、建築を志すようになり、遠ざかっていた母教会に戻って来て、再び教会を経験するところから、田淵諭氏の教会建築家としての歩みが始まる。彼の信仰の原点への回帰が、教会建築の仕事と結びつく。教会を建てるという行為の中に、主の御言葉が込められていると語る田淵の言葉は、建築家の実存がかかっている。「どんな礼拝をするのか、どんな祈りをするのか、どんな伝道をするのか、どんな学びをしていくのか」。これら

の問いの具体化が教会建築だと田淵は語る。

教会建築を始めようとする時、どれだけ予算があるのか、どれだけ献金が集まるのか、会衆の希望は何かなど、私たちの側のニーズだけが優先してしまうのではないだろうか。もちろん、予算も工期も礼拝堂の使い勝手もすべて重要である。しかし、私たちの教会は、神の言葉が聴かれ、聖礼典が行われるところである。そのような信仰に関わる認識が、プロテスタントの礼拝堂を設計する基底にある。建築家としての力量と信仰者としての見識を見事に融合させて、田淵氏は数多くの美しい教会堂建築を生み出してきたのである。

本書には、田淵氏の設計になる三〇余の教会の資料、写真とともに、「教会私論」と題した教会設計に関する理念

や思想、加えて、田淵氏が折に触れて世界の諸教会を訪ね

歩いた時に描かれた美しいスケッチと文章も収められている。読者はどの部分からでも読むことができる。読み物としての楽しさとともに、教会建築の幻を持つ諸教会と教会員にとっての必須の情報が満ちている。教会にぜひ備え付けて、会堂建築が始まる前に、すべての教会員が教会建築とは何かを本書によって共有できるなら、素晴らしい会堂建築への第一歩となることだろう。

主の日ごとに、田淵諭氏の設計した礼拝堂で礼拝を捧げながら、時間と共に変化する光の中で、変わることはない御言葉を聴き、祈りが満ちる経験は何にも代えがたい恵みである。

(B5変型判・三三〇頁・定価三九六〇円・教文館)

(せきかわ・やすひろ Ⅱ大森めぐみ教会牧師)

ヨベルの新刊/既刊案内



【ヨーロッパ思想史】
金子晴勇 キリスト教思想史の諸時代
【別巻2】
アウグスティヌス 三位一体論を読む
若き日の取り組みから70年を経て、ついに完成した『三位一体論』の詳細なコンテナー！
古代キリスト教最大の成果であるこの教義を「カリスマー聖い愛」の本性から解明した書。
三位一体の類似像を発見する手引きとなつているのが愛の現象であり、この愛が知性を媒介にしてその存在構造が解明されたことがここに明らかになった。しかも愛の本性は対象に向かいながら同時に自己に向かつている。(本書より)

全9巻完結!

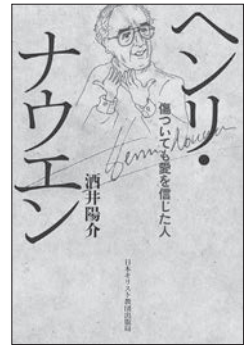
- I 『ヨーロッパ精神の源流』〔2版〕
- II 『アウグスティヌスの思想世界』〔在庫僅少〕
- III 『ヨーロッパ中世の思想家たち』〔在庫僅少〕
- IV 『エラスムスと教養世界』
新書判装、平均二七二頁、各巻本体一三〇〇円
- V 『ルターの思索』
- VI 『宗教改革と近代思想』
- VII 『現代思想との対決』
- 別巻1 『アウグスティヌスの霊性思想』
- 別巻2 『アウグスティヌス「三位一体論」を読む』〔新刊〕

反響!

ヨベル YOBEL Inc. info@yobel.co.jp
〒113-0033 東京都文京区本郷4-1-1-5F
TEL.03(3818)4851 FAX.03(3818)4858
出版の手引き/呈 (税込)

自分の傷を見つめ、 奉仕する人になるために

〈評者〉 英隆 一朗



ヘンリー・ナウエン

傷ついても愛を信じた人

酒井陽介著



ある人の本を読み続けると、その人ととても親しくなることがある。会ったこともないのに、実際に話をしたわけでもないのに、その人が自分の親友であるような錯覚を抱くことがある。ヘンリー・ナウエンはまさにそのような著者の典型と言えるかもしれない。それは、彼の著作の中で、自分の喜びや悲しみを素直にわかち合ってくれるからだろう。それを読む私たちも、「分かる分かる、そのとおり」という感じで同感してしまう。だから、昔からの友人であるように思えるのではないか。ということは、彼の生きた時代は、私たちの時代そのものであって、その中であがき苦しんでいたナウエンは、もう一人の自分なのだ。

酒井陽介神父の『ヘンリー・ナウエン 傷ついても愛を信じた人』という評伝を読むことは、ナウエンを再発見し、自分を再発見する貴重な機会となるように思える。自分の

いづくナウエン像はその人なりでかまわないが、このような評伝を通して、より広い観点から見つめ直すと、さらなる理解が広がり深まるのではないか。

まず、第一章現代の靈性の変遷と第二章ナウエン自身の靈性の変遷は、彼のバックグラウンドを理解するのに役立つ。どんな靈性も突然変異のように現れることはまれだ。ともに暮らした家族や社会の息づかいを反映しているからだ。

特に、現代の靈性の変化を概略するところ（18頁から）と、ナウエンの両親の記述（35頁から）が印象深い。それを読むと、ナウエンの人となりさらに明瞭になる。人は誰しも父母から多大な影響を受けているし、時代の空気を吸っているから。このようなバックグラウンドは、ナウエンの靈性を理解するためだけでなく、自分の靈性を理解する上でも重要な要素だと思う。自分自身が社会の流れからど

ヨブ記の新たな読み方を示す

ヨブ記を読もう 苦難から自由へ

並木浩一

ヨブ記は苦難と悪の問題に正面から取り組む、魅力的で難解な文書だ。その難解なテキストの背後にある思考を、『ヨブ記注解』の著者が自身による訳を用いてやさしく解きあかす。

●四六判 並製・224頁・定価2,640円

『ヨブ記 並木浩一訳』が
出版ウェブサイトで読めます！

右記QRよりアクセスできます。



シリーズ全3巻完結！

遠藤周作探究 全3巻《最終回記本》

III 遠藤周作の文学 とキリスト教

山根道公

長年、遠藤周作研究に従事してきた著者による論考集。遠藤周作の聖書理解、吉満義彦や井上洋治が与えた影響、幾度にわたる闘病経験が作品にどう反映されているのかなどを考察する。

●A5判 上製・352頁・定価4,180円



箴言10-12章の構文等を吟味

文脈の中のアフォーリズム 箴言10-12章の構成の研究

加藤久美子

『箴言』の第二部分にあたる10章1節～22章16節で展開されているのは、単純な個人の応報思想ではない—構文や語形の考察を通して構造や統一性を示す。

●A5判 上製・352頁・定価6,600円



日本キリスト教団出版局

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18

☎03-3204-0422 ☎03-3204-0457

E-mail eigyou@bp.uccj.or.jp (価格10%税込)

https://bp-uccj.jp

のような影響を受け、家族から何を受け継いでいるのかを振り返るのも有意義だろう。なぜなら、ナウエンを読む人は、自ずと自分の信仰のあり方が問われてくるのだから。

第三章以下はナウエンの霊性の特徴をさまざまな角度から分析し、興味深い。これらの記述を読み進めていくと、ナウエンの霊性が多角的に理解できるようになっている。と思いつつも、結局は、ナウエン自身、たった一つのことしか言っていない気がしてくる。彼の一番のキーワード「傷ついた癒やし人 (the wounded healer)」である。評者自身、このことばに出合ったときの衝撃は今でも忘れられない。第五章でしっかりと分析されているが、結局、ナウエンはずっと傷ついた癒やし人であった。そして、彼の本を愛読する人びとも傷ついた癒やし人ではなからうか。自

分自身が傷を負いつつ、それと同時に、誰かのために役立つたいと願って生きている。ナウエンを映し鏡として、自分を見つめ直すことができる。

特記したいのは、セクシュアリティに言及するところ(122頁から)だ。ナウエンに同性愛的傾向があったのはよく知られていることだが、それについて積極的に発言することはなかった。時代はLGBTが教会でも意識される時代になった。彼が今、生きていれば何を語っただろうか。彼の未完のことばを、今の私たちがどう語るのか、それが問われている。(はなふさ・りゅういちろう)カトリックイエズス会員、カトリック六甲教会主任司祭

(四六判・一六八頁・定価一九八〇円・日本キリスト教団出版局)

「ごどもの神学」を喜ぶ神学へ！

〔評者〕 久保木聡



ごどもの神学

神を「ごども」として考える

李 信建著
朴 昌洙訳



「あなた、どうしてごどもを静かにさせられないの！
ちゃんと子育てしなさい！」

一喝の声が教会堂に集う親子に突き刺さる。震える親子は教会に自分たちの居場所を見出せなくなる。やがてこの若い親子は教会に足を向けなくなる。

一喝した人も悪気があったわけではない。静寂で秩序だった教会を目指していたのだろう。ただ私自身の限られた出会いではあるけれど、こうしたケースは、一喝した本人が常日頃から自分の中のこどもらしさを抑えつけ、自身のこども性を開示することが苦手なことが多いように思う。

本書はまず児童虐待の問題に焦点をあてる。虐待する親が非難されることが多いが、実のところ、その親自身も虐待の被害者として育ってきたケースも多い（もちろん、だからといって虐待をしていいわけではない）。自らのこども

もらしさを健全に表現することができず、抑えつけ、わが子のこどもらしさを許容できなくなるがゆえに虐待行為に至ってしまう。

われわれはともすると、大人になっても自分の中にある、こどもらしさ、こども性を見ないようにしがちであるし、軽んじやすいのかもしれない。本書の特徴は徹頭徹尾、こどもであることに着目し、こどもであることを重要視しようとする。

こどもは虐待を受けやすい弱者であり、無力な存在である。そんな中で著者は、「神がその無能さ・無力さ・受苦の中でご自身を真の神として啓示されると主張するバルト、ボンヘッファー、モルトマンの見解を紹介し、続けて神が男性性と女性性、もしくは父性と母性を含んでいる両性的な方でありながら、同時に性を超越した方であると主張す



新刊

死生学年報 2024

看取りの文化を構想する

東洋英和女学院大学
死生学研究所編
●A5判並製 定価2,750円

「人として」出会う

一人暮らしの「生と死」を支える人たち
浮ヶ谷幸代

●
特別養護老人ホームの看取り
における「ホームカミング」の意義
相澤 出

●
看取りのドゥーラをめぐる
文化人類学的考現学

最後の寄り添い人が
臨死期をどう変えていくのか
林美枝子

●
生と死の共存する世界に生きる
認知症患者の穏やかな死
大村哲夫

●
非宗教者による
スピリチュアルケア
山本佳世子

●
医療現場における
チャプレンの宗教性とは
中井珠恵

●
伝記的な生の諸相と
二人称の不死
小笠原史樹

●
他、2篇

LITHON [リトン]

〒101-0061 千代田区神田三崎町2-9-5-402
TEL03-3238-7678 FAX03-3238-7638

るモルトマン、リユーサー、ラッセルの見解を紹介し」（八二頁）ている。そして「女性の神学を代弁する神学者たちは、こどもたちの解放に対しても十分な関心を傾けているが故に、こどもたちの解放に寄与する神学体系を實際に立てているだろうか。」（八二・八三頁）と問う。こうしてフェミニズムの神学者たちと対話しながら、『こどもの神学』を打ち立てようとする。

第3章ではイエスの中にみるこども性を扱い、第4章ではこども性から着目した神観について、第5章では神の私たちとこどもについて扱う。第6章ではこども性に基づいた終末理解が語られ、最終章の第7章ではこどもらしい霊性について扱われる。つまり、この『こどもらしさ』を大切にするならどのような信仰生活が開かれていくかを描く。

評者は本書の訳者である村昌洙氏を超教派のとある集會にて説教者としてお招きしたことがある。神学的に聡明でとても知的に語られる側面とともに、本書がこどもの特徴として語る純真さ、素朴さ、素直さ、謙遜さ、遊び心を併せ持った人格であるとともに、かつ情熱的な説教を語られることにとっても驚かされた。朴氏が恩師である著者の『組織神学入門』に続いて本書を訳されたことに妙に納得している。本書『こどもの神学』は朴氏本人にとっての生き方そのものとなつていようだ。本書を読むことで、さらにこどもらしさを受け入れ、教会が弱さの中にあるこどもたちをもっと受け入れていけることを願ってやまない。

（くぼき・さとし）日本ナザレン教団大阪桃谷教会牧師
（四六判・三三八頁・一九八〇円・ヨベル）

へブライ原語が読めなくても！

豊かに養われる。

〈評者〉飯郷友康



師父たちの食卓で3

百年間のカウントダウン

創世記を味わう 第5章〜第7章

ジュセツペ三木 一著

佐藤弥生訳

松島雄一監修



某神学校「旧約原典講読」授業中の対話を、以下に再現する。

講師 旧約聖書の大部分は、へブライ語（一部分はアラム語）で書かれました。

学生 知っています。旧約聖書をへブライ語の原文で読めるようになりたいので、頑張ります。よろしくお願いいたします。

講師 旧約聖書は全部で三十九巻あるといわれます。どの巻を読みたいですか。

学生 まず創世記から読みたいです。

講師 なるほど。創世記にかぎらず旧約聖書の全体を読むうえで、へブライ語の知識は十分条件かもしれませんが、必要条件ではありません。最近、面白い本を読みました。こちらです。

『百年間のカウントダウン——創世記を味わう 第5章〜第7章——「師父たちの食卓で3」』（ジュセツペ三木一著・佐藤弥生訳・松島雄一監修）

著者のジュセツペ先生は、創世記を原文のへブライ語で読みません。フランス語、ギリシヤ語、ラテン語、日本語の翻訳文を、丁寧に読み比べていきます。創世記は確かに大事な書物なので、私もよく読み返しますが、いきなりへブライ語の原文を読むようなことは減多にしません。まず日本語の翻訳を幾つか読み比べて、それからへブライ語の原文にとりかかります。皆様も、そうしてください。

学生 どの日本語訳を読めばいいのですか。

講師 どれでもいいし、何語でもかまいません。日ごろ読み慣れた聖書を読み直してから、それ以外の聖書と読み比べます。そして両者の違いを探してください。いいですか、

違いを探します。間違いを探すものではありません。

学生 どちらが間違いか、ヘブライ語の原文を読まないと分かりませんか？

講師 ヘブライ語の原文を読むと、別のことが分かる場合もあります。どんな場合でしょう。

学生 原文は一本。それに対して、翻訳は二本。どちらかが間違いでなければ、どちらも間違いですね。

講師 さらに別のことも分かる場合があります。どんな場合でしょう。

学生 もしかすると、どちらも正しい。

講師 そう。ヘブライ語の原文が曖昧だから、どのように翻訳しても「それはそれで、あり」という場合ですね。

学生 信用できないなあ。その原文は、本当に曖昧なのですか。聖書をヘブライ語の原文で読み慣れた人の意見を聞きたいところです。

講師 面白いアプリを紹介しましょう。スマホかタブレットかパソコンをお持ちですか。こちら、閲覧もダウンロードも無料です。Sefaria: A Living Library of Torah (URL は <https://www.sefaria.org/texts>) このアプリは、聖書をヘブライ語の原文で読み慣れた人（いわゆる、生き字引）たちの宴会場みたいなものです。原文の意味はこうだ

ろう、いやそうじゃないと大騒ぎで、楽しいですよ。

学生 アプリは使えないし、宴会は苦手です。

講師 それなら、さきほど紹介したジュセツベ先生の本を読みましょう。あの本は、旧約聖書をギリシャ語の翻訳で読み慣れた人たちの談話室みたいなものですから。落ち着いて勉強できますし、自信もつきますよ。「ヘブライ語を知らなくても聖書を読むことはできるんだな」ってね。

(いいこう・ともやす || 東京外国語大学、立教新座中学・高等学校、農村伝道神学校など非常勤講師)

(A5判・一五二頁・定価一七六〇円・ヨベル)

金子晴勇著 *絶賛発売中

「良心」の天路歷程

隠れたアンテナ効果とは？

天上への道は良心のそれである。M・ルター

〈良心〉は、人間の生存と存在の根源(霊性)に深く根を下ろしている。

四六判・304頁・定価一九八〇円

ISBN978-4-909871-97-8

ヨベル YOBEL Inc.
お問い合わせ: info@yobel.co.jp
情報: <http://www.yobel.co.jp>

自然世界と仲良くするために

〔評者〕 関根清三



旧約聖書と環境倫理
 人格としての自然世界
 マリ・ヨアスタッド著
 魯 恩碩訳



マリ・ヨアスタッドは、旧約聖書学、環境倫理学を専攻するバンクーバー神学校の准教授である。彼女は本書で、

現代の環境倫理の問題を広汎に視野に収めつつ、これへの良き指針を与えるものとして、旧約聖書の諸テクストを読み解いていく。彼女は「世界と仲良くする」(二七七頁)ことの大切さを訴え、旧約聖書はそうしたメッセージへと人々を誘うものと考え(一二三頁)。

著者にとって、レビ記の食事法や土地所有の規則は、ふつう解されるように神信仰の強度を測るための形式的な律法などではない。それはむしろ、人間が動物をいつどのよう

に食することが許されるか、植物を生み出す神の賜物である土地をどこまで人間のために利用してよいのかを示すこと

によって、人間と宇宙の愛の関係の秩序と内実を示すものなのである。そしてイスラエルとYHWHの関係の中

に、この関係が組み込まれているという(四五頁)。

「バシヤンの樅の木よ、泣き叫べ。人を寄せつけなかった森も倒された」(ゼカー一・二)という預言でイメージされているのは、捕囚解放後、バビロンからの帰還民がイスラエルに定住するため、豊かなレバノンの森林を伐採する状況である。その際、木も人間と同じように、その生命が脅かされて悲しみ嘆くと、預言者は敏感に語っていることに著者は注目する(一七四頁以下)。

意識を持たない存在に感覚や行動などあり得ないと、現代人は考えがちだ。しかしこれはデカルトの心身二元論に縛られた発想であり、現代にも残っているアニミズム社会のフィールドワークに携わる人類学者は、そこを突破しようとする。そしてその成果は、旧約の人格的自然観にも当てはまる、と著者は言う。旧約では、土地は道徳的責任

を持ち(レビ二五・四―五)、人も神も山や空と対話し(ミカ六・一―二)、木や川は神を賛美する(詩九八・七―九)。社会性、感情、道徳的責任を有する人格は、人間だけの専有物ではなく、自然世界もまたこれを持っているというのが、旧約の自然観なのだ(三六頁)。

いずれにせよ、環境破壊に対して、我々が自然への愛情と理解をもつて立ち向かうならば、自然もまた愛情をもつて返してくれると言われる。すなわち、「砂漠はクロッカスのように花を咲かせ……喜びと歓喜に満ちたものとなる」(イザ三五・一)。自然に人格的なものを見出す感性と語彙によって旧約が豊かに語っている、そうした自然との関係性の回復を、旧約のテクストの読み直しによって新たに学ぼうという著者のメッセージは、明るく示唆に富む(特に三〇三頁以下)。

ただ疑問がないわけではない。自然災害は神からの裁きとして読まれてはならないと著者は主張する(一二三頁以下)。しかし旧約はしばしば、災害を神の裁きとして描くのである(出一一・一以下、民一一・三三、エレ一五・一―三等々)。ここではどうしても、世界をどう見るかだけでなく、神をどう理解するかについても、眼光紙背に徹する現代的な読み替えが必要になるのではないか。すなわち、

著者がするようなアニミズムの人類学的検討だけでなく、パネンティズム(万有在神論)をめぐる神学的・哲学的検討もまた必須になるのではないか。

本稿を筆者は、能登半島地震の半月後に書いている。現実には自然環境の方が人間と「仲良く」してくれない場合も多々あり、そもそも生態系の連鎖は残忍な弱肉強食の掟に支配されている。生き物は、他の生き物の命を奪って生き残らざるを得ないのである。それに対して、全てを神の奇跡的介入に託して、「雌牛と熊は草を食べ、相ともに伏すのはその子ら。獅子は牛のように藁を食らう」(イザ一・七)といった、終末論的平和を思い描いて休心することが、環境倫理に対する責任ある態度であり得ないことは言うまでもない。我々は、旧約聖書と環境倫理を結び付ける本書の興味深い提案の数々に刺激を受けつつ、では旧約の負の遺産と正の遺産をどう腑分けしていくかといった、更なる問いに直面することを促されるのではないだろうか。ヨアスタッドの刺激的な著作を紹介してくださり、日本の読者を様々な対話と思索へと誘ってくださる、訳者・魯恩碩教授に感謝したい。

(せきね・せいぞう) 聖学院大学大学院特命教授
(A5判・三四四頁・定価六〇五〇円・教文館)

最新の出来事にも留意した 初学者にやさしい教科書

〈評者〉 大宮有博



アメリカ聖公会の歴史

ロバート・W・プリチャード著

西原廉太監訳

中原康貴訳



聖公会の皆さん、ご自分の教派をいっつもどう説明していますか？「イギリス国教会の流れを汲んだ教派です」つて言う説明に、もやもやしてませんか？ そのもやもやはをはいのける本格的なアングリカンスタディーズ（聖公会研究）の本が出ました。本書の原著は、アメリカの神学校で、聖公会聖職候補生が聖公会の法憲法規と歴史を学ぶ授業の教科書として版を重ねているものです。「教科書!？」と身構えてしまうかもしれませんが、平易に訳されているため、とても読みやすいです。

また、本書は聖公会の歴史だけでなく、広くアメリカ・キリスト教史に関心のある方にもお薦めです。と云いますのも、アメリカ・キリスト教史は教派史とも言えます。ヨーロッパでローマ・カトリックから分かれたプロテスタントは、アメリカで教派になり、分裂や合同を経て現在の

形になりました。それどころかカトリックもアメリカでは一つの教派です。そして教派は、エスニシティや社会階級といった社会集団と結びつきます。アメリカ聖公会は、歴代大統領の多くがこの教派に属していることから推し量れますように、エスタブリッシュメントに多いと言われています。

今世紀になって、どの教派も例外なく衰退し、代わって、超教派単立メガチャーチの数が増えています。それでもアメリカ・キリスト教史をつかむには、それぞれの教派がどのように形成されたかをなぞるのが近道です。

本書の優れた点を、ほかの教派史の教科書と比較していくつか挙げます。まず、教派史の教科書というものは、人名・地名（教会名）の羅列に紙幅が割かれてしまうものです。しかし、本書は読んでいて、固有名詞の羅列に苦しめ

られることはありませんでした。また、多くの教派史がアメリカ宗敎史の基礎知識を前提にしているのに対して、本書は大覚醒や奴隷廃止論争、ファンダメンタリストⅡモダニスト論争といったアメリカ宗敎史の大きな出来事についても、キリスト敎初學者に親切な説明がついています。例えば、多くの教派が奴隷廃止論争やファンダメンタリストⅡモダニスト論争で自派を分裂させてしまうのですが、聖公会はそういった論争でも教派を分裂させませんでした。その点を本書では、主敎会が慎重な結論を出す過程が詳しく書かれています。

さらに、たいいていの歴史敎科書は、古い出来事ほど詳細に記すのに、最近の出来事になると歯切れの悪い不親切な記述で終わってしまうものです。そこにはまだ生きている当事者への配慮があるのでしょうか……。本書は新しい出来事——例えばセクシャリテイ論争や敎勢減による組織の再構築——についてもかなり踏み込んで述べています。聖公会の女性司祭誕生の経緯は、キリスト敎史（さらには女性運動史）の大きな出来事なので、その分詳しく書かれています。また、かなりの紙幅が割かれているセクシャリテイ論争では、主敎や聖公会に属する神學者の発言が具体的に引用されています。パンデミック対応については、リ

モートに対応した式文を作り、陪餐を工夫する姿が描かれています。

なお、本書は、聖公会の視点からメソジスト敎会について述べる箇所がいくつかあります。特にアフリカンメソジスト監督敎会誕生のきっかけとなった聖ジョージ敎会事件についての記述は、クエーカーの支援があつたという私も軽視していた点が書かれていて参考になりました。

このように思いつくままに書きましたが、本書の出版によって、日本のアングリカンスタディーズそしてアメリカ・キリスト敎研究の層が厚くなることは間違いないと確信しました。

（おみや・ともひろ 関西学院大学敎授）
（A5判・四八六頁・定価五七二〇円・敎文館）

既刊案内 (2023年12月~2024年1月)

編・著・訳者	書名	判型	頁	定価(税込)	版元	発行日
酒井陽介 著	ヘンリ・ナウエン —傷ついても愛を信じた人	四六	168	1,980	日本キリスト 教団出版局	12/15
菊地 讓 著	すべての命に平和を —剣を打ち直して鋤とする2	四六	230	2,860	日本キリスト 教団出版局	12/1
大田正紀 著	日本近代文学と聖書	四六	302	4,840	一麦出版社	12/3
グウェン・R・P・ノルマン著 後藤哲夫 訳	カナダ合同教会 日本での百年 —カナダ・メソジストの歩み [明治・大正編]	A5	500	4,950	教文館	12/13
加藤常昭 著	慰めとしての教会に生きる	A5	324	4,290	教文館	12/20
矢田部千佳子 著	愛に祈る人 —無教会キリスト教伝道者 實田愛子の生涯	四六	120	1,100	教文館	12/20
金子晴勇 著	「良心」の天路歷程 —隠れたアンテナ効果とは?	四六	296	1,980	ヨベル	12/15
李信建 著 朴昌洙 訳	こどもの神学 —神を「こども」として考える	四六	328	1,980	ヨベル	12/15
紫園香、 菅野万利子 共著	ヒヤッハウ! おばあさん だって冒険したい! —闇夜にまたたく星 それは道しるべ	80+ 四六 口絵 1丁	1,100	ヨベル	12/15	
ジュセツペ 三木一著 佐藤弥生 訳 松島雄一 監修	百年間のカウントダウン —創世記を味わう 第5章~ 第7章 [師父たちの食卓で3]	A5	160	1,760	ヨベル	12/20
キリスト教年鑑編集委員会編著	キリスト教年鑑 2023 ~ 2024	B5	1186	18,700	キリスト新聞社	12/25
W・ロス・ヘイスティングス著 小山清孝 訳	悲しみに壊れた心はどこへ行くの? —死との和解の神学	四六	288	2,200	ヨベル	1/20
大井満責任編集	2023 ケズィック・コンベンション説教集 キリストの光に照らされて歩む	四六	160	1,650	ヨベル	1/30
鹿住輝之 著	キルケゴールのキリスト論 —同時代のヘーゲル主義者との関係で	A5	300	4,950	新教出版社	1/24
宮平 望 著	旧約聖書 預言書 —要約と概説	A5	305	2,530	新教出版社	1/24
小見のぞみ 著	聖書のお話を子どもたちへ	四六	128	1,540	日本キリスト 教団出版局	1/24
時津ハインツ、 大津磨由美 共著	日本カトリック教会の音楽 —明治期から昭和初期まで・ 宣教師らの軌跡とともに	A5	402	6,820	日本キリスト 教団出版局	1/25
石浜みかる 著	証言・満州キリスト教開拓村 —国策移民迎いの果てに	A5	240	3,300	日本キリスト 教団出版局	1/25
川村信三、清水有子編 キリシタン文化研究会監修	キリシタン 1622 —殉教・列聖・布教聖省 400年目の省察	四六	352	3,520	教文館	1/25
関西学院大学神学部編	関西学院大学神学部ブックレット 16 キリスト教の看取り・送り	A5	102	1,650	キリスト新聞社	1/25

書店名	郵便番号	住所	電話	ファックス	URL	メール	郵便振替
北海道キリスト教書店	060-0807	札幌市北区北七条西6丁目	011-737-1721	011-747-5979	http://www.jb-shop.com	sasaki@jb-shop.com	02770-2-56520
善隣館書店	020-0025	盛岡市大沢川原3-2-37	019-654-1216	共用		zenrikan_systen_0530@ghoo.co.jp	02350-0-874
エッセイの木	980-0012	仙台市青葉区錦町1-13-6 エマオ1F	022-223-2736	022-302-6678	https://sendaicbs.uccj.jp/	info@sendaicbs.uccj.jp	02230-0-31152
恵泉書房	260-0021	千葉市中央区新館2-2 千葉カシヤセンタービル	043-238-1224	043-247-3072	http://www.keisen.christian.jp	keisen@vestia.ocn.ne.jp	00120-9-43619
教文館	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3561-8448	03-3563-1288	http://www.kyobunkwan.co.jp	xbooks@kyobunkwan.co.jp	00120-2-11357
待晨堂	167-0053	東京都杉並区西荻南3-16-1	03-3333-5778	共用	http://taishindo-books.jimbo.com/	taishindo@sj.com.home.ne.jp	00110-8-95827
バイブルハウス南青山	104-0061	東京都中央区銀座4-5-1	03-3567-1995	03-3567-4435	http://biblehouse.jp	biblehouse@bible.or.jp	00160-2-18410
東京キリスト教書店	162-0814	東京都港区新小川町9-1日キ坂内(外販専門)	03-3260-5663	03-3260-5637		tokyo@nikkihan.co.jp	00130-3-60976
横浜キリスト教書店	231-0063	横浜市中区花咲町3-96	045-241-3820	045-241-5881	http://www.tuighte.ne.jp/~yokohamacs/index.html	sksch@mva.biglobe.ne.jp	00250-4-2512
清光書店	951-8114	新潟市営所通一番町313	025-229-0656	共用			00560-8-51419
静岡聖文舎	420-0866	静岡市葵区西草深町20-26	054-260-6644	054-260-5612	http://www.s-seibun.co.jp/	info@s-seibun.co.jp	00810-8-26558
名古屋聖文舎	466-0045	岐阜市瑞穂区瑞穂16日本キリスト教団瑞穂会館	052-680-8090	052-680-8091	http://nagoya-seibunsha.la.coccan.jp/	nagoya-seibunsha@nifty.com	00810-5-14073
京都ヨルダン社	602-0854	京都市上京区荒神口通河原町東入ル	075-211-6675	075-211-2834	http://web.kyoto-net.or.jp/people/kjordan/	kjordan@mbox.kyoto-net.or.jp	01010-2-594
大阪キリスト教書店	530-0013	大阪市北区茶屋町2-30	06-6377-6026	06-6377-6027	http://osekacbs.web.fc2.com/	ochrbook@river.ocn.ne.jp	00990-3-43009
神戸キリスト教書店	650-0021	神戸市中央区三宮町3-9-18三陽ビル2F	078-331-7569	078-945-9388		kobex@nikkihan.co.jp	00170-2-421390
広聖文舎	730-0841	広島市中区舟入町12-7	082-208-0022	082-208-0177		hseibun0951@yahoo.co.jp	01360-4-1958
リバーサイドブックス	779-1105	徳島県阿南市羽ノ浦町古庄大道ノ西13	090-8694-4986	050-3142-3017		ykwb3@gmail.com	16220-17974891
松山キリスト教書店	790-0804	松山市中一乃町1-23	089-921-5519	089-921-5413	http://www.gojocs.jp/roshiyama_1007/index.html	sksch@dokidoki.ne.jp	01650-1-2120
新生館	810-0073	福岡市中央区舞鶴2-7-7	092-712-6123	092-781-5484	http://www.simseikan.jp/	info@simseikan.jp	01750-5-10932
キリスト教書店ハレルヤ	862-0971	熊本市大江4-20-23	096-372-3503	共用		k-haleruya@bible.or.jp	00160-2-18410
沖縄キリスト教書店	904-2143	沖縄県沖縄市知花4丁目12-33	098-927-0220	098-938-1102	https://www.okinawacbs.net	info@okinawacbs.net	01790-4-152916

※一般書店関係の方は 日キ販営業部 TEL 03-3260-5670 にご連絡ください。

福音と世界

2024年4月号

特集Ⅱ復活と世界―復活の社会化 共同化

寄稿者Ⅱ金井美彦、浅野淳博、島しづ子

森本典子、佐原光児、榎本空

日本基督教団と北森神学2（川口葉子）

合評会報告「日本におけるキリスト教フェミニスト運動史」（大嶋果織）／好評連載

教会におけるマイクログレッション、新約釈義

ルカ福音書（山崎ランサム和彦、古代イスラエル文学史序説（勝村弘也）ほか

A5判・定価660円・〒70円

定期購読についてはお気軽にご相談下さい。

新教出版社 TEL: 03-3260-6148

Email: sales@shinkyoy-pb.com

編集室から



本紙『本のひろば』がリニューアルして3カ月。そろそろ新しい表紙にも慣れていただけただ頃だろうか。愛読者の方はすでにお気づきのことと思われるが、『本のひろば』のウェブサイト (<https://honhiro.com/>) も2年前にリニューアルし、さかのぼって過去の書評も全文読めるという夢のようなサービスを提供している。裏表紙のQRコードからも簡単に開くことができるので、ぜひご活用いただきたい。「リニューアルを謳いつつ、中身はほとんど変わっていないじゃないか!」とお叱りを受けないよう、編集・企画にも新しい発想が求められるだろう。

カトリック教会では、『あけぼの』（聖パウロ女子修道会）に続き『カトリック生活』（ドン・ボスコ社）も3月号で70

予告

本のひろば

2024年5月号

本・批評と紹介

（巻頭エッセイ）家山華子（書評）金子晴勇著『良心』の天路歷程、小林よう子著『これから生きるあなたへ』、望月麻生監修・著『保育者の祈り』、ゲウエン・R・P・ノルマン著『カナダ合同教会 日本での百年』、近藤勝彦著『キリストこそわれらの平和』他

年以上におよぶ歴史に幕を下ろした。どうか避ける道はなかったのかと忸怩たる思いである。同じカトリック誌『福音宣教』（オリエンズ宗教研究所）3月号で南野森氏（憲法学者）が言及しているとおり、「なくなるときにはもう遅い。なくなつて困るものは、読者が支えなければならぬ」。「惜しいことをした」と悔やんでも後の祭り。キリスト教関係の施設、団体、媒体が次々と活動を終えていく状況に対し、ただ「時代の流れ」「出版不況」だけを理由に何の打開策も打ち出せないのだとすれば、やはり読者だけでなく責任ある関係者の怠慢との指摘も免れまい。

リニューアルといえば、『信徒の友』が4月から刷新されるという。すでに年間の特集テーマも開陳されているが、内容的にもより充実した誌面となるよう大いに期待したい。

（松谷）

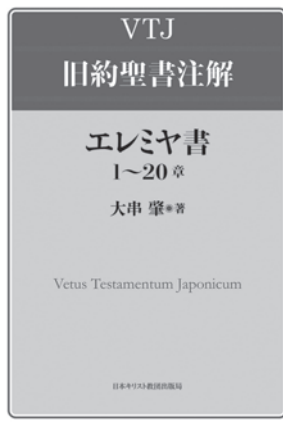
日本語で書き下ろす聖書注解シリーズ最新刊

VTJ旧約聖書注解 エレミヤ書 大串 肇 1~20章

2024年3月22日刊行予定

「審判」と「救済」という大きな二つのテーマがそのなかに響きわたっているエレミヤ書。難解なこの書を、40年近くにわたって研究してきた著者が最新の研究を反映させながら丁寧に解説。

◆A5判 上製・616頁・定価9,240円



プレゼントキャンペーンのご案内

【キリスト教専門書店限定】

本書のご購入に加えて、VTJ・NTJシリーズ既刊タイトル4点以上のご購入で、『**ここが変わった！「聖書協会共同訳」旧約編・新約編」2冊セット**』をプレゼント！

既刊の紹介や本キャンペーンのお申込書は、右記QR読み取りでアクセスいただけるPDFをご参照ください。

お申し込み期限：2024年7月31日

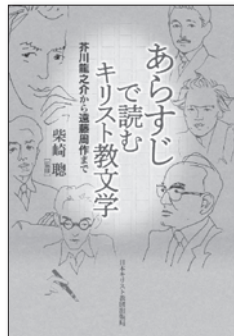


あらすじで読む キリスト教文学

芥川龍之介から遠藤周作まで

柴崎 聰 監修

2024年3月21日刊行予定



『南京の基督』（芥川龍之介）や『ころ』（夏目漱石）など、キリスト教のエッセンスが含まれる名作24作品をあらすじで紹介。
◆四六判並製・160頁・定価1760円

説教ワークブック

豊かな説教のための15講

トマス・H・トロウガー／
レオノラ・タブス・ティスデール

吉村和雄 訳

2024年3月19日刊行予定



米国イェール神学校の説教の授業を紙上再現。なぜ説教が会衆に届かないか、どうすればマンネリを脱せられるか示唆に富む一冊。
◆A5判並製・200頁・定価3300円

ユダヤ慈善の近代化

ユダヤ教社会事業の実態に迫る！

田中利光 著



西洋の福祉思想の淵源ともなったユダヤ教の慈善文化は、近代の社会変革にどのように呼応したのか？ 世俗的な社会事業との関係や女性たちの国際的な活動からその実態を探る。『ユダヤ慈善研究』（社会事業史学会第34回社会事業史文獻賞受賞）に続く画期的研究！

● A5判・上製・170頁・定価3,300円

既刊好評発売中！

ユダヤ慈善研究

田中利光 著



欧米の福祉思想の源流は、古代ユダヤ社会の慈善にあった。聖書やミシナなど原典を渉猟し、貧困者や病者の扶助、女性の社会活動の実態を探り、ユダヤ教と原始キリスト教における慈善の制度・実践を各論的に考察する先駆的研究！

● A5判・上製・356頁・定価5,060円

タムソン宣教師夫人

メアリーの日記

(1872-1878)

メアリー・タムソン 著

中島耕二編
阿曾安治訳



アメリカ長老教会宣教師として1873(明治6)年に来日し、伝道と教育に奉仕したメアリー・タムソンが残した初期の滞日日記の邦訳。東京初のプロテスタント教会の仮牧師となった夫デビッドと協働したメアリーの、宣教への思いと篤い信仰心を伝える貴重な証言。

● 四六判・並製・224頁・定価2,970円

無教会の変革

贖罪信仰から信仰義認へ
信仰義認から義認信仰へ

荒井克浩 著



無教会の信仰に潜む勝者の論理を、どのように乗り越えられるのか？ 無力な「十字架につけられたままのキリスト」への集中から生まれた、新しい信仰の展望を描き出す書。最相葉月氏、青野太潮氏推薦！

● A5判・並製・320頁・定価1,980円

旧約新約聖書大事典

旧約新約聖書大事典編集委員会 編

聖書学だけでなく、古代言語学・歴史学・考古学・宗教学などの成果を結集し好評を博した大事典が、手に取りやすい縮刷版で登場！ 早期購入特典として、同時復刊の『新装復刻版』聖書地図を応募者全員にプレゼント(応募締切:2024年4月末)。

● A5判・上製・函入・1456頁・定価29,700円

早期購入特典は『聖書地図』を応募者全員に！



『縮刷版』

一九五七年七月一日発行 第三種郵便物認可
二〇二四年四月一日発行 (毎月一回・一回発行)
本ひろば 第七九六号 二〇二四年四月号

発行所 〒163-0214 東京都新宿区新小川町九-1 一般財団法人キリスト教文書センター
電話03-3361-6520 振替00170-511679
発行人 金子和人 編集人 村上信児 印刷所 モリモト印刷株式会社
発売所 日本キリスト教書販株式会社 電話03-3361-5670

定価七八円(税抜七一円) 63円
1年分1100円(送料共)

教文館

〒104-0061 東京都中央区銀座4-5-1
電話 03-3561-5549(出版部直通)《呈・図書目録》

キリスト教の書籍やCD、グッズのご注文は(e-shop 教文館) <http://shop-kyobunkwan.com/> まで！



本のひろば.com

